

実践記録（小6・学級活動）

1 ねらい

ネット上のコミュニケーションの心理的特性について理解し、相手の感情を想定しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができるようにする。

2 手立て

・ 付箋紙を用いた疑似体験

ワークシート上で、LINEのやり取りのようにコミュニケーションを疑似体験させる。登場する人物によって色の違う付箋紙を用いることで、自分の行動を考えたり相手の感情を想定したりすることができるようにする。

・ 客観視

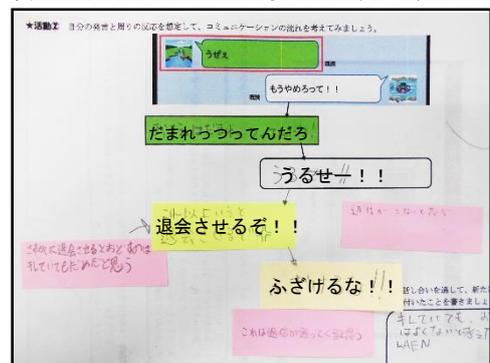
疑似体験によるコミュニケーションの流れ（自分の考え）と、それに対する友達の考えを、付箋紙を用いてワークシート上に残し、可視化する。これにより、疑似体験における自分の考えや対話での友達の考えを、客観的に捉えて振り返ることができるようにする。

3 実践の様子

児童は、前時の学習でグループLINEの疑似体験をした。その際には、グループLINEでのトラブルを止めようとする立場で、相手とのコミュニケーションについて考えさせたが、本時の学習では、感情的に発言している人の立場で考えさせた。自分が考えた発言と、その発言に対する相手の返事をシートに書かせると、「だまれ!!!」、「うるせー!!!」等の、感情的な言葉の言い合いになってしまうと想定している内容が多く見られた。【資料】

次に、自分が想定したコミュニケーションの流れを友達に見せながら、自分の考えを伝える活動を行った。友達の考えを聞いたら、それに対する自分の考えを赤色の付箋紙に書き、気になったポイントとして残させた。「この言い方が気になったんだけど、違う反応もあるんじゃないかな。」と、話し合いが途切れずに、具体的な内容を伝え合うことができた。

最後に、対話を終えてから、自分のワークシートを客観的に振り返らせた。新たに考えたことや気付いたことを発表させ、その内容も踏まえて、ネット社会で生き抜いていくために、どのような考え方や行動が必要になるのかをワークシートに記述させた。



【資料】児童が考えたコミュニケーションの流れ

4 成果と課題

- 付箋紙を用いて、LINEのコミュニケーションを疑似体験させたことで、情報社会のコミュニケーションに感情移入をしながら、自分の行動や相手の感情を考えさせることができた。
- 新たに考えたことや気付いたことを書かせてから、今後必要となる行動について考えさせる場面において、教師主導で話を進めてしまった。児童自身に必要性を感じさせるための手立てが必要であった。